

ピリピ人への手紙 第4章 4節

「いつも主にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい。」

この勧めは獄中にある者からです。明日がわからないまま繋がれている者から送られたことばです。決して楽な状況ではない、むしろ生死の時がわからないまま捕らえられている者からのことばです。それが、いつも喜びなさいです。そのように勧めることばの送り手は獄中にあっても喜びを知っているはずです。いつも、ですから、どのような状況にあっても通用する喜びがあるということです。

その答えは、いつも主にあって、です。敵に捕らえられ、獄中にいます。自由な生活から縛られ不自由な日々、窮屈で厳しい環境にいます。しかし、それらの事柄に言及することなく、伝えることは、いつも主にあっての自分です。主にある自分こそが真の自分であり、主にある自分こそ誰にも奪われることのない喜びを与えられています。

だから、ヨーロッパで初めての教会へ、生まれただばかりの教会へ、いつも主にあって喜びなさいと勧めます。主に在る者の喜びから、もう一度言います。喜びなさい。全ての困難に勝る、主にある喜びがあります。